

「ライフスキル形成を基礎とする喫煙、飲酒、薬物乱用防止教育」

神戸大学教授 川端徹朗先生

報告者 副会長 井上吉郎

12月2日、平成22年度学校環境衛生・薬事衛生研究協議会が東京で開催された。米国疾病予防管理センター（CDC: Center for Disease Control and Prevention）は青少年期に以下の6つの危険行動（①故意または不慮の事故に関する行動、②喫煙、③飲酒及び薬物乱用、④望まない妊娠、HIVを含む性感染に関係する性行動、⑤不健康な食行動、⑥運動不足）を抑制することが種々問題解決の最優先課題であるとしている。このような行動は10代青少年期に形成され、相互関係が強い。【最近の調査で今までにたばこを吸ったことがある者の割合は小学校6年男子で20%、女子で10%に達し、月喫煙率は男子では中学1年、女子では高校1年から増加している。飲酒の月飲酒率はさらに高く、小学校5年生男子13%、女子12%で、高校3年男子で48%、女子36%である。】

薬物に関しては喫煙、飲酒の経験と密接な関係がある成績が出ており、他の危険行動に関しても互いに関係がある。

青少年期に急増する喫煙、飲酒、薬物乱用等の危険行動は1. 不安に対処する、2. 仲間から認められる、3. 自分に生きる価値や能力があると感じる といった青少年にとって基本的な要求を満たす行動である。遠い将来の危険を心配するより、現在の状況を満たすために喫煙、飲酒、薬物乱用に陥る。このような青少年に喫煙、飲酒、薬物の危険性を強調し、脅し教育をしてもさほど意味がない。これらの行動を避けるために必要な事はライフスキル（一般的心理社会能力）を形成することが重要である。

心理社会能力 自分の価値や能力に対する自信を育て、日頃の不安、人間関係の問題を自他ともに有益なやり方で解決する力

セルフエスティーム形成 健全な自尊心、意志決定スキル、ストレス対処スキル、対人関係スキル等の力

ボドヴィンによって喫煙、飲酒、薬物乱用防止教育でのライフスキルトレーニングプログラムの有効性が確認され、ライフスキルは今日最も喫煙、飲酒、薬物乱

用防止に有効な教育プログラムとされている。ライフスキルに基づく健康教育プログラムは青少年の将来の身体的問題に直接つながる行動に対する有効性ばかりでなく、いじめ、暴力、不登校、学業不振などの青少年の知的、精神的・社会的発達阻害の抑制や、反社会的・非社会的行動の防止にも適用されつつある。思春期の様々な危険行動の根底にはセルフエスティームなどのライフスキルの問題が存在しており、これらのライフスキル形成なくしては本質的な解決にはつながらないと考えられるようになった。中央教育審議会は、学校教育が目指すべき基本的目標は激しい社会を生き抜く必要な資質や能力「生きる力」であると強調している。ライフスキル教育は、青少年の健康維持に重要であるとともに教育上の目標「生きる力」にも有効である。ライフスキルは「生きる力」である「自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、より良く問題を解決する資質や能力」や「自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心など、豊かな人間性」に極めて近い概念だからである。これらの概念を含めたライフスキルの向上が将来を含めた青少年の人生の質の向上につながる。講演を聴講して学校薬剤師も喫煙、飲酒、薬物等の危険性だけではなく、ライフスキルを学び、危険防止スキルの形成に沿って話をしなければならなかったと感じた。

